

2012年「看護の日・看護週間」



第2回「忘れられない看護エピソード」集



公益社団法人日本看護協会



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】厚生労働省／日本看護協会

【後援】文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】日本病院会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全日本病院協会／全国自治体病院協議会

日本助産師会／日本精神科看護技術協会／日本訪問看護財団

テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)

(株)ジェイティービー／(株)ソシエ・ワールド／トップツアー(株)／ナガイレーベン(株)／ワタキューセイモア(株)

こころまで、看る。

はじめに

5月12日は看護の日です。

近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ1990年に制定されました。それ以来、「看護の心をみんなの心に」をメインテーマに厚生労働省と日本看護協会の主催で、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。

2012年度は、第2回「忘れられない看護エピソード」を看護職と一般の皆さまから募集。2952通の応募の中から、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員の森本レオさん（俳優）らによる、選りすぐりのエピソードを22作品、収録しました。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護師にとっても、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない言葉をもらうこともあります。

看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のストーリーが、生きる素晴らしさを思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会



【看護職部門】目次

最優秀賞	
「伝わる瞬間」	3
内館牧子賞	
「二度目の戴帽式」	4
優秀賞	
「ありがとうの使命」	5
「気持ち受けとめて」	6
入選	
「あの日ことは忘れない」	7
「猪さがし」	8
「その人のためだけの看護師さん」	9
「先輩が気付かせてくれたもの」	10
「笑顔でハイタッチ」	11
「家族が持ってきた「枚の写真」	12
「30年前の少女と「緒に」	13

伝わる瞬間



【埼玉県・佐々木敦子^{ささきあつこ}】

私は結婚を機に、一時看護から離れ、海外で出産、子育てをしました。子連れで帰国し成田に着いて

はっとした時、抱っこしていた息子が私の髪の毛をひっぱり、髪飾りが目の前にぶら下がってきました。その

とき、看護師になって一年目のあの出来事を思い出しました。

今から20数年前、神経内科病棟で担当したALS（筋萎縮性側索硬化症）のAさんは、話すことも動くこともできません。朝のケアを始めた時、わずかに残されたまぶたと

頬の動きで私に「何か」を伝えようとしています。隣にいた奥さまも文字盤で私との「通訳」を試みます。

「み」「ぎ」「へ」「や」？ 何のことかわからず、「右？」「部屋？」「自分の右？」「向かって右？」奥さまもいつもとは違う内容にいら立ち「もうわかんないっ！」

いつも穏やかで、根気よく何事も教えてくださるAさんは「もういい！」。奥さまも「やっぱりはつきり言っ

てよ！ わからないと気持ち悪い！」。ついに文字盤を挟んで夫婦げんかとなり、いつもは紳士のAさん

も穏やかな笑顔が消え、イライラ

海外に行き、言葉が通じない経験をして、あらためてそのつらさを

実感しました。病気や障害によって、意志を伝えることが難しい患者さんが多くいらっしゃいます。私はそ

のつらさ、苦しさを忘れず、そして伝えること、伝えることの喜びを大切に

して、今日も看護師を続けています。

二度目の戴帽式



【福島県・徳田のぞみ^{とくだ}】

はなく、ただの子どもでいたかった。

私が看護師に戻ったのは、母に告知

しないことと決めた日だった。母らしい最期を看取ろうと心に誓った。

入院前「今度してあげる」と約束した白髪染めをした。仕上がり

鏡で見た母の、自慢のえくぼが輝いた。絶食中の母の口に、医師の許可

を得て、巨峰を一粒入れると「おいしいわ」と喜んでくれた。おむつを

交換すると「こんな日が来るなんてなあ」と照れくさそうだった。どの母

も愛しくて、できることは何でもしてあげたいと思った。

私が困っている時、差し出してく

れた母の手はいつも温かった。私が母に差し出した手は、温かった

だろうか。最期に母は患者になっ

て、私が看護師を生涯続けていくためのヒントをくれたように思う。

「困っている人にお母さんのように温かい手を差し出せる看護師になる」。

ひつぎの中の、黒く染まった髪の毛に誓った。私にとって二度目の、忘れられない戴帽式だった。

ありがとうの使命

看護職部門
優秀賞

【岩手県・舟越五百子^{ふなこしおこ}】

東日本大震災後、1カ月が経過していた。沿岸の中学校の救護所には、その日もたくさんの方が訪れていた。深いしわが刻まれた顔、静かに澄んだ目、日焼けして、ふしくれた指、思いやりのある語り口。ああ、今日も大好きな岩手の方がいっぱい！

その人は少し恥ずかしそうに「風邪をひいてしまったので、薬をもらえればと思って…」と、うつむきがちに言った。雪が降り積もる中、仮設風呂設営のお手伝いをしたらしい。私はいつも通り「今までにかかったご病気は？」「お薬で気分が悪くなったことは？」など、簡単な問診を進めていった。

するとその人はためらいがちに「リンパの病気で…。もう頭だの、肺だの、体中にとんでるって言われている。盛岡の病院さ入院したんだけども、もうできる治療がないからって。地元の病院さ紹介されて、退院して薬飲んでんだけど、みんな津波に持っていかれた。まんつなあ、残り1カ月だってのになあ」と語った。

私はドキリとして声を失った。日々、悪性リンパ腫の患者さんと接していた私には、その人が近々たどるであろう道筋が浮かんできた。そして「人のお世話をしている場合じゃないでしょう。自分の方がずっと大変じゃないですか！」と正直思った。それでもやっと「ご病気もお持ちの上に、津波で大変でしたね。仮設風呂は外の作業ですか？」という言葉、を、口からひねり出した。

その人は「おなごさん達も入るからって、俺には外の仕事をしろだつてさ」と言っていて、顔をくしゃくしゃにして笑った。それから少し神妙な面持ちになって「俺に贈られた最後の仕事だと思っている。皆が喜んでる顔を見ているとうれしくてさ」と付け加えた。その瞬間、私には「使命」という言葉が降ってきたように思われた。

その人は薬を受け取ると、大事そうに胸に抱えて「来て良かった。いつも遠くからありがとう」と言った。私は思わず「ありがとう、ごさいます」と答えて、涙をのみこんだ。

気持ち受けとめて

看護職部門
優秀賞

【静岡県・犬塚久美子^{いぬづかくみこ}】

「ばあちゃん、またガラクタを集めて、いい加減にして」。

面会にきたお嫁さんの鋭い言葉が病棟に響きました。認知症を患っている患者さんは急いで風呂敷包みを抱え、形相を変えて廊下の隅にうずくまりました。

私はその成り行きを見ていました。風呂敷包みを離すまいと必死で抱え込む患者さん。何とか包みをほごうとするお嫁さん。争いは激しくなるばかりです。仲裁に入ろうとした時です。

「ヨシさんはガラクタではなく、大切な思い出を風呂敷に包んでいるのです。何とか大目に見てくれませんか」

凜とした落ち着いた声を出したのは、新人看護師でした。私は一瞬戸惑いました。「仕事がうまくいかないの、看護師を辞めたい」と本人から相談を受けていたからです。ヨシさんはほっとしたようでした。お嫁さんは苦虫をつぶしたような表情で、

「いつもそう言って取っておくから、くだらないもので家がゴミ屋敷になっているのよ、あんたにわかるの」

「新人が偉そうなことを言ってますみません。私の祖母が「人は思い出とともに生きる」と教えてくれました。これはヨシさんの大切な思い出の品だと思ったのです」。

お嫁さんが立ち去った気まずい雰囲気の中で、ヨシさんが「ありがとう」と言いました。

少しの時間が過ぎた後、家族が帰ったエレベーターの前に一人の患者さんが長い時間、立ちつくしていました。「一緒にお家に帰りたいかったですね」。肩を抱いて声を掛けたのもその新人看護師でした。エレベーターを見つめて目に涙をためていました。

「息子に捨てられた」
「息子さんも帰るのはつらかったと思います」患者さんはうなずきました。

「また会いに来てくれるといいですね」

「昔はいい息子だった」
「お部屋に行きますか」

患者さんと歩調を合わせる姿に優しさがにじみ出ていました。

人一倍、患者さんの気持ちたちがわかるのだから、きっと看護師続けられるよ。

あの日のことは忘れない

【宮城県・栗野久美^{あわのくみ}】

看護職部門
入選

3・11、私たちが自然の猛威に触れた日。

会議中に、経験したことのない揺れを感じ、皆で体を寄せ合った。立ってられない衝撃。地なりと揺れが永遠に続き、地球が壊れる！鳥肌が止まらなかった。余震が続く中、利用者の安否確認を開始。怖さなどはなく、夢中だった。昔、海沿いに住んでいたハルさんから「地震の後は津波が来る」と聞いていたが、そんなことは忘れていた。ラジオで津波警報を聞くまでは。

大津波到来。多くの方が犠牲になった。その中にやっさんもいた。やっさんは、独りでは歩く事ができず、介護が必要な状態だった。

津波が来る2時間前に、私はやっさんのお風呂を手伝っていた。歩くのが不自由だったため、バリカンで坊主頭に散髪したこともあり、私のことを床屋さんと呼んでいた。「今日は床屋さんが来る日」。いつも、訪問を心待ちにしてくれていた。湯船

の中で、村田英雄の歌をワンコーラス歌い、その大きな歌声と私の笑い声を聞いて、奥さんが浴室をのぞきに来るくらい、気持ちよくお風呂に入った。そして「来週、床屋さんしようね」と約束もした。

約束を守る事ができなかった。

最後に会ったのが私であったため、知る限りの身体の特徴や着衣の情報を提供した。涙が止まらなかった。何度も最後となったお風呂のことを思い出した。私が訪問中であれば、一緒に逃げる事ができたかもしれない……と何度も考えた。私も一緒に津波に遭っていたかもしれないとも。

もうすぐ、1年が経つ。あの日のことは、何年経っても、忘れることができないだろう。あのような状況で、訪問看護師として何をすべきだったのか。今後のためにも、考えていく必要があると感じられてならない。

猪さがし

戴帽式が済み、実習に出たばかりのころ、昭和20年代の忘れられない体験である。

愛と奉仕を胸に、ナースとして知と技を修得するため、初めて病室に入るのに「いかがですか」と微笑みかけるのも、緊張と不安の連続だった。4人の受け持ち患者の中に、白血病のSさんがいた。どんな病気なのか、あわてて図書館で調べた。

当時の医学書には「白血球が腫瘍性増生し血中に遊出し、六カ月以内に100%死亡。原因不明、高熱を持って発病……」とあり、死期の迫った病人にどんな看護をすればいいのか途方にくれた。完全看護とは言え、Sさんの母親は毎日着替えを持って来て、汗ばんだ寝間着を替え、脱脂綿を指に巻き息子の口の中をぬぐう。Sさんは赤ん坊のように母のなすがままにしている。私はこの母の看護に打たれた。

「父親が戦死した後、兄ちゃんは家族のために、頑張りすぎたんです。米軍基地の土木作業は賃金がいと、番担ぎを夏休み中やって家計を助けてくれたの。この熱に猪のおもちやがあれば……」

「猪って何ですか」私は聞いた。

「心配でハ野見（はつけみ）にみてもらったら、猪が病を食ってくれる」と言われて。探しても、どこにも売ってなくて」と漏らした。

「母さんたら、猪で熱が下がれば、医者も薬も要らないだろ」。Sさんは乾いた唇をとがらせた。私には、慰めようもなかった。

勤務後、猪さがしに寮を出た。デパートや狸小路のおもちゃ店にもなかった。「猪をお見舞いだなんて聞いたこともない」と笑われた。雪舞う中を歩きながら、看護の何かも分からないが、Sさんの母の心情に打たれ、その心に寄り添い、病苦が軽くなるよう祈っていた。そして十二支に猪がいると気付き、薄野の民芸店へ急いだ。店のおばさんに尋ねると猪の置物があると出してくれた。千円といわれた。当時、学資金として月に八百円支給されていた時代だ。持ち合わせでは足りず「残金は月末支払う」と頼む私を信じてくれた。のし紙をかけてもらい「祈り」と書いた。その足で眠っていたSさんの枕元に届けた。

看護職部門
入選

【神奈川県・佐藤れい子^{さとう}】

その人のためだけの看護師さん

看護職部門
入選

【京都府・森川美貴子】

もりかわみきこ

夏の深夜、16歳の少年が救急搬送されて来た。既に心臓マッサージなどが行われ、病院到着後、即座に救命処置がなされた。その少年は、なんとか一命は取りとめたが、医師から「両親に説明された内容は残酷なものだった。誰しもが半分諦めながら、彼と関わっている。そう思っていた。そして私も…」。

病室を訪問すると、両親は無言で涙を流しておられた。何度伺っても、何日伺っても涙は乾く事はなかった。そんな両親の姿を目にするのは胸が痛んだが、淡々と仕事をしなければ感情を抑えることができない気がした。

「看護師さん。例えば命を取り戻すことができたとしても、次に待っている試験はね、警察に行くこと。看護師さん也知道っているでしょ？この子、一人を死なせてしまったの。バイクでひいて。このまま死んでしまう方がこの子にとって幸せなのか、それとも…。看護師さん、どちらなのかな」

初めて口を開いたお母さんの言葉に、私は、だまつて手を握った。

「どんな結果が出ても試験だと思わないとね。だけど、許されるならこの子と一緒に相手様に償いたい」お母さんが痛々しかった。

その日、お母さんに「体を一緒に拭きませんか」と声を掛けてみた。お母さんは、体を拭きながら、目からあふれんばかりの涙を流していた。翌日も、その翌日も、口の中のケア、爪切り、着替え、ほとんどのケアをお母さんとともに行った。

急性期を越えた彼は転院となった。ストレッチャーの後ろには警察官2人と、両親が付き添っていた。

「看護師さん。看護師さんは他人だから本音を話せたの。私が口にした言葉は許されることではないものね。うれしかった。私たちの部屋に来てくれる時、看護師さんは私たちのためだけの看護師さんだったから」

何十人もの患者さんと関わる毎日。忘れたくないエピソード…。

先輩が気付かせてくれたもの

看護職部門
入選

【大阪府・山家いづみ】

やまが

看護師として働いて23年になる。今でも折に触れ思い出しては、現在の自分を振り返らせてくれる場面がある。

入職して5、6年目、手術室を経て外科病棟に勤務していた私は「自分は何でもできる」と自信過剰な時期であった。当時勤務していた病棟に、乳がん末期の女性が入院して来た。がんが全身に転移し、施す治療はなかった。ある日、いつもは穏やかな先輩看護師が廊下を走っている姿に急変を察知し、彼女を追って病室へ駆けつけた。

部屋は血の海だった。カーテンや壁に飛び散る大量の出血。がんが頸部の大血管を突き破った故の気管切開孔からの出血であった。「家族が来院し、納得するまでは続ける」との医師の指示に従い、心臓マッサージを続けた。心電図モニターの波形は両手を止めると直線になる。それでもマッサージの手を止めなかった。

娘さんが来院され、ようやく周囲の人の動きに目をやった。私の目に映ったものは、筆談用の紙に残さ

れた「くるしい」という患者の最期の言葉と、母親の変わり果てた姿に驚く娘さんの姿であった。そして患者の傍らには血まみれの患者の手をお湯で拭く先輩の姿があった。

こんな時に何をのんきな事を…。と思う私に「せめて娘さんに、手、握ってもらうねん。まだ温かいねんで」と言う先輩の言葉が突き刺さった。得意気に心臓マッサージを続けた自分が恥ずかしかった。先輩は救命センターから配属された救命のエキスパート。若い私など足元にも及ばないくらい知識も技術もある。彼女の言葉に、てんぐになっていた私の鼻がぽきつと折れた。涙が止まらなかった。

患者は何を必要としているか。あの患者に必要だったのは蘇生処置でも家族の納得でもない、ただ一人の家族との絆だった。あれから20年近く経つ。看護とは自己研さん。ゴールはない。あの時の先輩の姿が、慢心に陥りそうな自分をいつもリセットしてくれる。

笑顔でハイタッチ

看護職部門
入選

【広島県・那須万里^{なすまり}】

時計職人だったAさんは、その日の予定や「時間」に対するこだわりがあり、何度も予定確認のためにナースコールを押していました。寝たきりで、ナースコールを常に握りしめていました。自分の思うようにスタッフの手ですべてをやってもらいたいという要望を持っていて、思い通りにならないと、スタッフに対して声を荒げることもありました。

目が覚めるとナースコール、特別何もなくてもナースコールをする状態でした。ナースコールをする時間帯を見ると、昼夜はあまり関係なく、目が覚めるとナースコールをします。つまり覚醒している時間帯で、しかも家族が帰られた直後が特に多いように感じました。

そこで、Aさんへの訪問回数を増やし、その日の予定を聞かれる度に何度でも伝えて「次の自分のとるべき行動が分からない」という不安を取り除くよう努めました。そしてそ

の都度、部屋から退出する際にハイタッチをするようにしてみました。初めはげんそうな表情でしたが、しだいに柔らかくなり、笑顔も出てくるようになりました。Aさんの手に常に握られていたナースコールはなくなりました。その代わりに万年筆を持ち、日記を書くことを日課としています。

今でも「時間」に対するこだわりは強いAさんです。しかし、自分で行えることはやってみようという意欲も表れています。日課である日記もAさんに了承を得て読ませてもらっています。毎日スタッフの名前が出てくる日記に、一緒に笑いながら読みます。そして、退室する際はやはりハイタッチです。

きっと、笑顔でハイタッチをしながらの退院もそう遠くはないはずです。

家族が持ってきた一枚の写真

看護職部門
入選

【徳島県・古泉サト子^{こいずみ}】

「そんなに泣かないで」
泣いているのは私。看護師長になって2年目、46歳。私に抱きつかれ、泣かれてしまった70歳の女性は、母親が娘を論しているかのように私の頭をなでながら、そう言った。

ある日の夜、私は看護師から「患者さんがいなくなった」との連絡を受け、急いで病棟に行った。その患者さんは肝性脳症の初期症状によって、時々状況判断ができなくなっていた。大勢で病院内を捜したが見つからず、警察に捜索を依頼することとなった。病院の周辺を捜しても見つからず、駐車場に帰ってくると警察犬も出動しており、私の緊張がさらに高まった。

病棟に戻るとご主人がお見えになっていた。私は、ご主人が手にしていた一枚の写真を見て衝撃を受けた。セットされた髪や訪問着から、慶事のための装いとは思いますが、その姿には自然な美しさがあった。

肝性脳症になると思考に変化をきたし、人格まで変化したか、と思われてしまうような症状が出る。この患者さんもそうであった。しか

し、ご主人が持ってきた写真には、それを思わせる姿は写っていないかった。

私は自分の間違いに気が付いた。私が捜していたのは、上下別の柄のジャマを着てしまったり、病室がわからなかったりする患者さんであった。ご主人がこの写真を選んだ理由はなんだろう？と考えた時「これが私の妻です」。ご主人の心の声が聞こえた気がした。妻の今の姿を受け入れながらも「本当の妻はこうです。わかってください」と示してくれた気がした。

私はもう一度、建物を捜すことにした。別館は先に捜した場所であり、一緒にいた当直師長に「そっちはさっき私が見たよ」と言われたが、なぜか気になって向かった。すると、廊下が少し明るくなり、使わなくなった診察室からゆくり出てくる人の姿が見えた。こちらを見たその人は、間違いなくあの写真の女性であった。女性に抱きついた瞬間から涙が止まらなくなった。そして、私は彼女の優しさに包まれた。

30年前の少女と一緒に

看護職部門
入選

【宮崎県・竹田栄子】

ただえいこ

昭和58年4月。都会からUターンした私は、結核病棟のある小さな個人病院に勤務することになった。その病棟には16歳のNちゃんが入院していた。はじけんばかりの笑顔とおしゃべりが大好きな、ハイビスカスのような少女だった。また仕事に不慣れな私に、小さな情報をそつと教えてくれる気遣いもしてくれた。

Nちゃんは退院審査会の日をとっても心待ちにしていた。その日の夕方、出勤した私は、廊下でばったり出会った彼女に「どうだった？」と尋ねた。目にいっぱい涙をためた彼女は「まだ入院が必要だって。私、高校留年が決定しちゃった」とうつむいた。やがてその声は号泣に変わり、私も一緒に泣いていた。

その後、遅れて高校を卒業したNちゃんは、以前のような明るさを取り戻し、たくさん面白い話を、外来通院の傍ら、私たちに聞かせてくれた。退院して10年経過したころ、彼女はまた、入院してきた。発熱と咳を伴った症状は繰り返され、状況

は少しずつ深刻度を増してきた。

仕事もままならない生活にNちゃんは疲れていた。診断は肺アスペルギルス症。「こんな肺いらない。ずつとずつと苦しかった。もういい。先生に手術お願いして」。泣きじゃくるNちゃんは、あの時以上に痛々しい小さな女の子だった。彼女を抱きしめながら、医師の言葉が胸をよぎった。「手術ができるといいけど癒着が激しいからな」。しかし彼女は手術を選択した。残った肺を大事にしてこの先の人生に賭けること。

あれから20年、当時の病院は閉鎖となり、Nちゃんは別の病院に通院している。時の流れは、彼女を母親へと成長させ、力強く生きること を教えた。45歳となった彼女は、私の勤務する産婦人科に時々検診にやってくる。帰り際「まだ辞めないでね」と必ずそつとつぶやく。「何をおっしゃるNちゃん。あなたと出会って30年。もう少しあなたを見ていたい」。私は笑って、いつも答える。

【一般部門】目次

楽しい話とすてきな笑顔と安心を	15
最優秀賞	
内館牧子賞	
靴音	16
優秀賞	
「Nさんからの卒業証書」	17
「心で食べたバースデーケーキ」	18
「泥だらけの白衣」	19
入選	
「寝なさい」	20
「下を向いてゴックン」	21
「不妊治療から得たもの」	22
「よかったよかった」	23
「優しい魔法」	24
「私のおばあちゃん」	25

楽しい話とすてきな笑顔と安心を

一般部門
最優秀賞

【愛媛県・森田欣也^{もりたきんや}】

私にはまだ、五円玉の穴ほどの目、大きな口、だんご鼻、福耳、まあいい言葉が残っていることを教えてくれた。

ポキポキポキ。枯木でも折るような音が、青空に響き渡った瞬間、体の自由、心の自由、夢、生きる希望。全て一瞬に失った。18歳だった私に突きつけられたのは、第三頸椎脱きゆう骨折という、あまりにも厳しくて、受け入れる事のできない現実だった。

7年ほどの入院生活の後、四肢まひの障害が残ったまま自宅へ帰った私のところに、近所の小さな病院から、当時、まだ珍しかった訪問看護師が来てくれるようになった。まるで壊れたロボットのようになりに、毎回、毎回、楽しい話をたくさんしてくれていたある日、何かに気付いたように「俳句作ってみない？次までに「句ね」と指切りされた。

来客の姿、日増しに雪だるま

そんな小学生の宿題のような俳句を「上手、面白い、うまいやん、

すごい」と、とにかく褒めてくれた。胸のあたりがなんかムズムズしてきた。

窓を開けると、鉛のような雲が、ひらがなのような雲に変わっていた。つくしやふきのとうがおいしく感じられた。雨ににおいがあある事を知った。眠れなくて怖いだけだった夜も、虫の声に「必死に口説いているんだろうな」と、想像するだけで楽しくなってきた。

来る日はウキウキし、来られない日はスースーする。これからも俳句を続けて、生きている証の本を「いつか絶対に出そう」と言う話にワクワクしてきた。百回の「ありがどう」に、百一回の「ありがどう」を返してくれる、その笑顔にドキドキする。そしてもうひとつ、大切な心が残っていたことを教えてくれた。

あの日から、20年近く経った今でも、心の訪問看護に来てくれていた。楽しい話とすてきな笑顔と安心を、たくさんたくさん持つて。

靴音

一般部門
内館牧子賞

【奈良県・中井雅博^{なかいまさひろ}】

祖父は長い間、がんを患い、暑い夏の1週間、昏睡が続いたのち他界した。昏睡に陥ってからというもの、主治医は形式的に回診するといった感じだった。とにもかくにも僕はその1週間、ずっと病院で寝泊まりした。

そして彼女はその病院の看護師だった。ある晩、暗い廊下の長椅子でうとうとしていると、リノリウムの床をコツコツと鳴らす靴音が近づいてきた。

祖父を受け持っている彼女は「風邪引くわよ」と声を掛けると、僕の横に腰を降ろした。非常灯だけがぼんやりとにじむ闇の中だった。「助からないと分かったら医者は手を抜く?」。僕はそんな質問をしたと思う。彼女は言葉を選びつつ「手は抜かないと思うけど、患者さんから気持ちが悪くしてしまうことはあるかもしれない。でも看護師に絶対それはない」。彼女は続けて「ドクターは患者さんを治療する者、でも私たちは看護する者なの。私たちの根底にあるものは医学じゃない。だから心配しないで」

彼女はそう言って立ち上がると、もどきた闇の中にゆっくりと吸い込まれていった。そこには靴音だけがいつまでも響いていた。

祖父が他界したとき、彼女は目を真っ赤にして僕らと一緒に涙を流した。そして彼女の最後の言葉は「お力になれなくて申し訳ございません」だった。僕はそのとき、彼女の言葉にうそはなかったと確信した。

広い世界には損得ぬきで他人に尽くす者がいる。彼女の根底に流れるものが何なのか、僕には知る由もない。彼女を突き動かすものが何なのか、僕には分からない。祖父は亡くなった。けれど、あの時僕は大切なことを教わったような気がする。本当の看護とは何なのか。医師は単なる治療者なのか。答えはまだ分からない。

僕は今、大学の医学部に学ぶ。彼女は人間としての僕の目標だ。いつか僕も医師として「心配しないで」と患者さんに言ってあげたい。靴音を聞くと今でも彼女のことを思い出す。

Nさんからの卒業証書

一般部門
優秀賞

【福島県・伊東伸也^{いとうしんや}】

脳内出血で倒れ、ようやく、今、自分の置かれている状況について理解できるようになったころ、担当看護師のNさんに「伊東さんは、学校の先生なんですか」と尋ねられました。

「そうだよ。今は、小学校の教員だけど、中学や高校で国語を教える資格も持っているよ」

「へー。私、国語って一番苦手だったんですよ」

「じゃあ、担当してもらっている間、Nさんの家庭(?)教師してあげようか」

こうして一日数分ではありますが、点滴のつけ外しのような時間に、Nさんに短歌や俳句の面白い方をレクチャーする日々が始まりました。

二カ月の後、リハビリが主となる病院への転院が決まると、Nさんから小さな花束を添えた卒業証書をいただきました。

教えた方でなく教えられた方からの卒業証書。

「三つ子の魂百まで」と言います

が、Nさんとのやりとりの中で、私の身体の中に培われてきた教員としての血を目覚めさせてくれたように思います。この病は、後遺症はもちろんですが、それより精神的なダメージが日常生活や社会復帰の妨げとなるのだと後々知ることになります。

意図されたものだったのでしょうか。Nさんとの何気ないやりとりは、実は私の本能を目覚めさせ、前向きに生きていこうとする気持ちをも育んでくれていたのだと気付いたのは、転院の後、しばらくしてからでした。

数カ月後、退院、復職を果たし、不自由ながら社会生活を営むことができるようになりました。子どもたちと、日々楽しくすごしながら、折に触れNさんを思い出し、感謝しています。

色あせた卒業証書は、書斎にござっております。

心で食べたバースデイケーキ

一般部門
優秀賞

【新潟県・福原きみ子^{ふくはら}】

次男が14歳の時、長岡赤十字病院に入院しました。病名は「急性リンパ性白血病」。約8カ月に及ぶ、死と隣り合わせの長く苦しい闘いでした。息子のそばで見守ることしかできなかったつらい毎日、先生や看護師さんたちの優しさにどれほど助けられたかわかりません。

幸い、夫の弟から骨髓移植を受けることができ、無菌室での生活が始まりました。病室の外側の廊下から、ガラス窓越しに様子を見守る日々。苦しむ息子に何もしてあげられない私は、息子の様子を見守りそと背中をさすってくださる看護師さんに感謝しながら過ごしていました。

そんなある日、私のいる廊下に3、4人の看護師さんが入って来られ、息子の部屋の窓ガラスに、色画用紙を切って作った花束とケーキを貼ってくれたのです。その日は息子の15歳の誕生日でした。びっくり

して照れくさそうに笑っている息子にインターフォンで「ハッピーバースデイ」を歌ってくれました。それからお祝いと励ましの言葉を代わる代わる言ってくれたのです。

そのころの息子は治療の副作用でケーキは言うまでもなく、病院の食事さえもあまり食べられずにいました。でも紙で作られた大きなバースデイケーキは、息子の心にしっかりと入っていたと思います。私は息子の前では絶対に見せないと決めていた涙を、その時ばかりは抑えきれませんでした。息子にとっても一生忘れられない誕生日になったと思います。

温かな、心のこもった看護のおかげで無事退院し、あれから9年。息子は社会人として元気に過ごしています。あの時いただいた花束とケーキは、友達が贈ってくれた千羽鶴と一緒に、大事な宝物として今も大切にしまっております。

泥だらけの白衣

【大阪府・北河森太郎】
きたがわしんたろう

一般部門
優秀賞

あんなに泥だらけの白衣を見たのは初めてのことだった。3・11の東日本大震災。発生後約一カ月が経ち、私は他の警察官と共に南三陸町にいた。町のイベントホールはすでに避難所となっており、被災者は寄り添うように暮らしていた。そのホールの隣には犠牲となった方たちがひつぎの中に横たわる安置所があった。私たちの任務はそこを訪れる遺族と、ご遺体との対面に立ち会うという、悲しみ極まるような任務だった。

安置所には私たちのほか、行政職員、医師、保健師、そして全国から派遣された看護師たちが常時、詰めていた。ご遺体と対面される遺族の中には悲観のあまり、卒倒したり気分が悪くなったりする人などもおられたから、それら医療従事者の存在が欠かせなくなっており、安置所と避難所の衛生面とともに、献身的で誠実な態度で勤務されていた。

その日、認知症のお婆さんが孫の名前を呼びながら迷い込んで来たとき、そばでしっかりとお婆さんの

手を握る看護師さんがいた。受付に

いた私が話を聞くと、安置所の外にある公園の砂場を、お婆さんが掘り返しながら「孫はここに埋まっている！ 助けて！ 助けて！」と叫んでいたらしい。それを見た看護師さんは、お婆さんに寄り添いながら「それなら私も一緒に捜すからね」と、二人で砂場を掘っていたそうだ。

童女のような表情のお婆さんに、その看護師さんは諭すように言った。「ほら。ここで皆さん安らかに眠ってるから。大丈夫よ、お婆ちゃん」。すると、安置所一杯に並んだひつぎに向かって、お婆さんは静かに合掌した。

砂場は前日からの雨で相当ぬかるんでいた。看護師さんの白衣は泥だらけだったが、悲嘆に暮れる遺族に分け隔てすることなく、精神的なケアを真心こめて行う姿は、私にはこのうえなく美しい姿に映った。間もなく娘さんがお婆さんを引き取りに来られたが、事の顛末を聞かされて、涙ながらに感謝しておられた。

泥だらけの白衣。その尊さを私は忘れない。

寝なさい

【東京都・松岡久仁子】
まつおかくにこ

一般部門
入選

病院の看護課長をしていた私の

母の、家庭看護の基本は、ごくあっさりしたものだった。医療の専門家だから、さぞ手厚く、医学的に高度な看病をしてもらっているに違いないと誤解されやすいが「寝なさい」の一言だけだった。テレビドラマで見ると、濃厚な看護や心配を受けたことは一度もない。「寝れば治る」というのは、多忙な母の言い訳のようにも聞こえた。

父が晩年、脳梗塞の発作を起こし、入退院を繰り返した。その度、私は学校帰りに、母は仕事帰りに、父の病室に集合し、大体はだまって本などを読んで、父の食事につきあい、面会時間の最後まで過ごした。「じゃあね」と言ったら父と別れ、父はだまってベッドから小さく手を振る。そして私は母は帰宅途中で食事をして帰るのだった。病室での母は、ただ時間をつぶしているような感じに見えた。

だから、三度目の発作の後、父が退院して、母がこう言ったときには

心底驚いた。

「父上がじっと天井のカーテンレールを見ていた時があったでしょう。あの時は怖かった。たぶん、死を意識していたと思う」

さらに退院してきた父が、こう言った時も驚いた。

「母上はああいう女だが、いいところもある。毎日、仕事の前に、私のことを祈って、お百度参りをしていたんだぞ」

家族として病室に居る、高度でも濃厚でもない看病の、父と母の、心の広げ方を、私は見破れなかった。

医学には限界がある。健康にも人生にも限界があり、また病氣にも限界がある。その限界を越えようとすると、私たちは祈るように心を広げるしかない。

「寝なさい」と言った母の言葉の後ろには、どれほどたくさんの想いが込められていたことだろう。病氣の体を休ませ、だまって見守り祈る。ただ、それだけが尊い場合もあるのだ。

下を向いてゴックン

【東京都・池野宗子】
いけのむねこ

一般部門
入選

99歳の父がK病院に緊急入院した。重篤な心不全で、危険な状態だと主治医から説明されて驚いた。当日の朝は紅茶とパンを食べていたのに、その状況が信じられなかった。

翌日、父はICUから一般病室に移った。お粥に好物のマグロのたたきを添えたところ、父は「美味しい」と言って食べた。その時「田中さん、うんちは出たの?」という大声とバタバタ走る足音が聞こえた。平穏な雰囲気が悪されて不愉快になった。看護師Yさんだった。いつも大声で患者さんとやりとりしていて、繊細さに欠けた人という印象だった。

父は徐々に飲み込む力が弱り、ミキサー食になった。食事の途中でせき込むことも増え、飲み込むときにすらそんな顔をするようになった。

どうしたら良いのか途方に暮れた。そんな時、Yさんが食事の介助に来た。一瞬嫌だと思った。ところが、Yさんはハスキーボイスを張り上げて「下向いてゴックンしてね」と言いながら、間違えて気管に入らな

いよう、慎重に、一生懸命食べさせようとした。父はその迫力と大声に励まされて、下をしっかりと向いて飲み込む努力をした。

Yさんは「口元ではなく、喉仏を見ていると飲み込めたか確認できますよ」と教えてくれた。さらに上手な食べ方のコツを教えてくれた。その後も病室に来るたびに、「ゆっくり食べてね。下を向いてゴックンしてくださいよ」と声を掛けながら食事をさせてくれた。Yさんの熱心な看護のおかげで、父は数日間しっかりと食事をとることができ、主治医から「奇跡的な回復ですね」と驚かれた。

残念ながら、その後父は亡くなったが、父の遺影を見るたびに「下を向いてゴックンですよ」というYさんの大きなハスキーボイスが聞こえてくる。Yさんに直接お礼を言う機会もなく、私達は慌ただしく病院を去ってしまった。

最後まで大好きなマグロのたたきを食べられた父は幸せでした。

ありがとう、Yさん。

不妊治療から得たもの

【新潟県・水野かすみ】
みずの

一般部門
入選

数年の不妊治療の末、授かった第一子は、二日以上かかる難産で、帝王切開となった。子どもとは自分できゅくり、産むものと思っていた。それが、医師に子どもをつくってもらい、おまけに子どもを取りだしてもらった。親戚中が喜んで連日面会に来る中、就寝前、ひっそりと、新生児室のガラス越しにわが子を見ては、涙が止まらなかった。本当に私は母親なのか?

ある日、一人の看護師さんが、私を後ろからじっと見ていた。不妊治療中からずっと私を見てくれていた看護師さん。後ろを振り向いたと同時に、両手を出してきた。

「私、自分で産めなかった」

主人にも言えず流せなかった涙。看護師さんは何も言わず、両手を握り

「頑張った」「頑張った」

とただ繰り返して、涙を拭いてくれた。

そうして、数年経ち第二子を自然妊娠した。その時、その病院は、

もう産婦人科をやめてしまい、私の中ではたたくさんの思い出だけが残った。痛い検査や、つらい治療の時に手を握ってくれた看護師さん。妊婦さんと違った待合室へ案内してくれた看護師さん、そして産後の私の涙を受け止めてくれた看護師さんがいた。

もう行くことはもうないかもしれない、川沿いの病院。あの看護師さんたちは今どうしているだろう。お医者さんの技術や患者の我慢だけでは、どうにもならない場面もある。そんな心や痛みのすき間を埋めてくれてありがとう。

最近、小学校のPTAの役員の声が掛かった。子どもを産むだけが親じゃないなあ。どんな大病院でも、有名なお医者さんがいても成り立たないものがある。病院と学校では勝手が違うけど、お医者さんや患者さんをサポートする看護師さんのように、PTA役員も、子どもの心を助けられるのではないか。最近ふと思った。

よかったよかった

【大阪府・糀谷終二】
こうやにしましゆういち

一般部門
入選

「えっ、出たの？ いいわよ、いいのよ。それにしても、よかった、よかったわね。これでお腹もほっとしてるわよ」

昭和55年、交通事故で首から下がまひし、その後遺症で排便疾患になった。薬を飲んでもすっきりとは出ず、その日も便秘日数は8日目になっていった。中枢神経を損傷しているため腹筋が付かない。そのため力んでも搾り出すまでにはいかず、医師は車いすをしっかりとこげば腸の運動になるから良いと言ってくれた。しかし、手も指もまひしている私にはその気にもなれず見送つて来た。

3月も半ば過ぎ、天気がとても良かった。病棟の看護師さんが、散歩でもしたらと言ってくれる。私も気分転換になるかと思いい、病院の周りを回ってみることにした。それが私にとって地獄を見ることになってしまった。

30分の散歩後、病室に戻る途中

で急に下腹部に異変が起った。変だと思ったその瞬間、車いすの上で脱糞。車いすをこぐことに脱糞が続く。私は臭いを撒き散らしながら帰院。看護師さんに恐る恐る「出てしまった」と声を詰まらせながら言った。看護師さんは「いいのよ」と笑みを浮かべながら、便をシャワー室で簡単に処理をする。私の縮こまった心がどんどん解けていった。

人は見せたくない羞恥（しゆうち）、自己嫌悪を持つている。それゆえ失敗をした時は、口に出せないくらいさがある。それを看護師さんが、まるで母親が子どもに言うように、優しい言葉で包んでくれる。

私は看護の世界が、いかにメンタルな世界を大きく受け持つているかを知った。そして、看護師さんが常に患者の立場に立って接し、患者にどれほど心の安堵感を与えているかを、大失敗から身を持って体験できた、唯一の事件であった。

優しい魔法

【和歌山県・柿本清美】
かきもときよみ

一般部門
入選

五歳の次男が心臓の手術を受けることになった。初体験の入院に興奮気味の次男は親の心配などつゆ知らず、柵付きベッドによじ登り、制止など聞かずに病棟を走り回る。その背中に「こらあ！ 廊下は走らない！」と看護師さんの声が響く。なんともにぎやかな入院生活の幕開けとなった。

ところが、こんなに腕白な次男でも、さすがに手術の前日ともなると急に無口になり、看護師さんが手術着のサイズを合わせに来てくれたり、スケジュールの説明に来てくれたりするたびに無理なことと言って困らせたり、甘えてみたり、すねてみたり。私もすっかり手をこまねいて見ているだけになってしまった。

そんな次男の様子を心配して、一人の看護師さんが現れた。手には「たんけんちず」と書かれた紙とシールが握られている。「よし、今から広い病院の中を探検に行こう」。

次男は『探検』という言葉に。パッと目を輝かせると「行くー」とベッドから跳び降りた。「じゃあ明日、恭ちゃんの身体に魔法をかけてくれる、手術室やICUがどこにあるか探しに行きまあす。見つけたら探検地図にシールを貼っていくよ」

そう言う看護師さんは「しばらくお預かりします」と私に頭を下げ、次男とともに探検に出発した。そして数十分後、次男は飛び切りの笑顔で戻ってきた。看護師さんの機転のきいたアイデアが、次男の硬くなった心を解きほぐしてくれたのだ。

手術当日。次男は自分の足でしっかりと歩き「こちやで」と、手術室まで私たちを先導してくれた。その上、別れ際には笑顔で手まで振ってみせ、かえって私たちの胸を締めつけた。

みんなに優しい魔法をかけられた次男は、今、元氣いっぱい走り回り、春の入学を心待ちにしている。

私のおばあちゃん

一般部門
入選

【岡山県・森下樹奈】
もりしたじゆな

私には大切な祖母がいます。4年前に定年退職しました。祖母は大学を出たときから、看護師をしていました。人と人のつながりを誰よりも大切にしている祖母は、毎日休まず、仕事に行っていたそうです。50代のころに、お腹を切る手術をしたそうです。私はまだ幼かったのですが、家族は叔父も母も、みんな自分のことよりも祖母の看護につきっきりだったのを今でも覚えています。

祖母は、通常の人よりも一週間も早く退院して仕事に復帰しました。定年までしっかり仕事をこなした祖母だったので、私は「これからの人生は自分の趣味や、やりたいことをして過ごしてね」と言いました。祖母は「わかったよ」と言ったのですが、次の日に朝早く出かけてしまいました。帰ってきた祖母に聞くと、「近所に介護が必要ならばあちゃん居るき、行ってきたんじゃ」と、言いました。

そして、夜に家族が集まると、祖

母は明るい声で「ひまじゃき、介護手伝うことにしたけん」と言いました。さすがに家族は焦って止めようとしたが一向に聞き入れてくれませんでした。

私は無茶をしなければ良いと思っ
ていましたが、どうしたことか、自
分の手作りパンを近所や友人に配
達していました。もう家族は注意
どころか、むしろ見守ることにしま
した。私が祖母にさりげなく聞いて
みると「まだ仕事をやりたい。でき
るときに、元気なときにみんなの笑
顔を見ておきたい。人の喜ぶ声や顔
を、しっかり焼きつけてお仏壇に感
謝するんが、今は一番幸せやから」
と笑顔で言ってくれました。

私はそんなポジティブな祖母を
尊敬しています。そして、祖母に私
がしてあげられることを手助けし
てあげたいと思います。祖母は人
と助け合い、支え合うことの喜び
を、仕事を通して学んだそうなの
で、私も学びたいです。

者の声 募らる 応募か

ご応募いただいた
方々から多くのコメントが
寄せられました。

「番しんどい時に支えてくださったことを心から感謝申し上げます。皆さまの体験談を知ることができて、大変励まされます。」
(男性・学生・30代)

「自分の看護を客観的に振り返る良い機会となり、私の今後の財産になると、作品を推敲しながら思いました。」
(女性・看護師・30代)

「祖母との思い出をあらためてたどることができました。どうもありがとうございます。」
(女性・音楽ライター・40代)

「過去の受賞作品を読ませて頂き、心があたたくなりました。素晴らしい企画だと思います。」
(男性・会社員・20代)

「こういった企画は看護の認知度を高めるうえで大変有用だと思います。ぜひこれからも続けていってください。」
(男性・看護師・30代)

「素晴らしいコンクールに、感激しております。世界中の人々が、皆様の情熱とお力で幸せになれることをずっと応援しております。」
(女性・主婦・40代)

「看護に関わっている人も関わっていない人も、看護エピソードを共有しようという考えにとても魅力を感じました。自分自身も看護についてもう一度考えるきっかけとなりました。」
(女性・学生・20代)

「東日本大震災で被災されながら、がん治療を必要とされる患者さんが多くいます。適切な医療や社会資源を速やかに受けられるよう、ひとりの看護師として切に願っています。このような投稿の場を与えていただき、ありがとうございます。」
(女性・看護師・30代)

「国家資格取得のために学業に励んでいます。まだまだ未熟ですが、原点を胸に、看護師への道を進んでいきたいと思っています。」
(男性・看護学生・20代)

「書きながら、昔のことを思い出しました。看護の仕事は激務かと思いますが、素敵な笑顔で不安な患者(とその家族)のためにがんばってください。」
(女性・主婦・40代)

「看護師として働く私にとつての大切な出会い。5才で亡くなつてしまつたけど、彼女の存在を誰かに知ってもらいたくて応募しました。」
(女性・看護師・40代)

「自分の入院生活を思い出しながら、後輩への応援メッセージのつもりで書いてみました。みんなに助けられて、今こうして仕事にも復帰できていることに感謝する毎日です。」
(女性・保健師・50代)